

陳情類型

多少、封建的臭味が抜けないが、民がお上に向つて実情を具申して善処を求める陳情と、下情を知り上意を伝えるための役人の視察　この陳情と視察ということは、昔も今も政治にとつて大きい役割を占めたものである。

近頃民主主義が流行し始めて、この陳情と視察は一層活潑になつてきた趣がある。国会の裏の街路には早朝から貸切のバスが列をなしている。議員会館の各部屋は来客で埋つてゐるし、議員応接室には数群の陳情者が待機している。現代は正に陳情時代といえよう。私は前後三回も大蔵大臣秘書官を勤めたので、役人の中では最も多く陳情者に応接する機会をもつた一人であらうと自負している。又それだけに陳情ズレがしている一人であるともいえよう。そこで私は、この陳情ということ进行分析して、その類型を摘出してみることにしよう。ただ類型といつても、ある一つの陳情が必ず何れかの類型に当てはまると主張するものではない。ここではい

わば陳情の純粹型をえくり出すにすぎないのであって、大抵の場合の陳情は多かれ少なかれ、ここにいう一つ以上の類型のもつ屬性を身につけたカクテルのようなものだと思ふ。御承知願いたい。

先ず私は「見物型」という一つの陳情型を見出す。氣候が良くなり仕事暇になつてくると全国津々浦々から大勢の人が一団となつて都入りをされる。東京見物或はこれに附随して日光見物又は成田さん詣りが本当の目的であるが、はじめからそうきめてかかるのは若干てれくさいといふので、何か中央政府に陳情するといふ本務をこしらえて入京される集団がある。予め用意される本務の種類は種々雑多であるが、多くは刷り物にした陳情書。その多くは抽象的であるが、を持参してくる場合が多い。この型の陳情は迫力を欠き、従つてまたこれに対する応答は至つて易しい。ていねいに応答してあげるだけで人々は御満足である。

これに引換へ同じ集団的陳情であつても応接に極めて骨の折れる陳情がある。それは終戦後特に顕著な労働組合の陳情である。これは陳情であるといふよりはその多くはむしろ示威であり、彼等の考えの押売強制でさえある。仮りにこれを「示威型」陳情と名づけておこう。この場合には必ず大臣というような最高責任者との面接を強要するのが例である。陳情の趣旨は始めから当方によく判つてゐるのだから、態々面接の必要はない筈だし、当方で屢々陳弁してみ

ても、先方がなるほどと納得して翻意することが殆んどないのだから、尚更応接の必要はないものといえるであろう。その人達は陳情をもまた一つの闘争の場と考え、静かな話し合いとは考えていないようである。従つて多くの場合、応接を断るのが例だが、その場合は大抵「坐り込み」という新しい戦術に出てくる。会うことも自由であれば会わないことも自由であるのがわれわれの基本的人権であるべき筈だが、会わないという人に無理にでも会うのだといつて面接を強要するのが例である。この人達が御自分では民主主義の選手であり花形であると心得ているのだから面白い。

ことある毎に真先きに陳情にかけつけてくる顔馴染の一群の人々がある。この種の陳情は各業者団体に多いようだ。例えば農民は各種の農業団体に属している。米価の問題、供出の問題、肥料問題等には必ず全国農業団体又は農民の団体の代表という資格で陳情にくる人達がある。陳情にかけてはなかなかの熟練工だ。陳情の要領を克く心得ている。どこに壺があるかもよく承知している。「示威型」のようにラジカルではないが、その言動の節にはちゃんとワサビを効かしてある。唯私が不思議に思うのは、その人達は口舌の雄であり白い手をされていることである。どういふ根拠によつて全国の農民から陳情を委任されたのかよく知らないが、その人

達が百姓ではないことだけはどうもたしかないように思われる。「こういう陳情は一応「職業型」と名付けられよう。かつて高橋是清蔵相が農村恐慌の時代に多くの農民の陳情に遭って閉口したことがある。高橋さんは、当時の久保文蔵秘書官（元大蔵省金融局長）に向つて「農村問題の陳情者の中で、その手がぢゅ、う、うのように大きな手をして、しかもその手の節がごぶしのように高い人は大臣室に通すように。白い手をした人は通さなくてよろしい」といわれたそうだが、この職業型と称される人達は、高橋さんに面接を断られた部類に属すると判断しても大きい誤りはなからう。

一緒に陳情する以上は、共同の目的をもつて一致した行動をとるのが常であると思うが、その集団の中には表見的には同一行動をとっているように見えても、実のところは当面の陳情目的が達成されては困ると内心心配しながらも、同じ陳情団に加わっている人達がおる場合がある。それは同業者団体といつても規模や工程や市場の相違があり、その利害が一致しない場合がある。例えば鉄鋼業者の団体であれば平炉メーカーもおれば一貫メーカーもおるといふ具合に。唯同業者団体の決議がある以上、この陳情の不成功を祈りつつも、尚いやいやながら同一行動をとっているに過ぎない場合がある。私が「呉越同舟型」といふのはこの種の陳情である。

「神がかり型」というのがある。元來陳情というにはその通りの実現はむずかしくても少々実現性のある合理的な事柄を内実にもった陳情でなければならぬが、始めから実現性のない夢のようなことをさも真面目に申し出る人がないではない。私が経験した例であるが、一人の中年の男がノボリを立てて私の部屋に跳び込んで来て、「自分は今朝早く前橋を立つて出てきたものであるが、昨夜就寝中、神様から御告げがあつた。神様は大蔵大臣のところへ行つて一億円受取つてこいと私にお告げになつた。現金でなくても国債でもよいと言われた。これはおそれ多い神様の御告げだから、是非叶えてもらいたい」と言われる。私は「自分達は神職ではない。人間を相手にした仕事をしている。神様をお相手にしているわけではない。」といつてお断りしたものである。

或る宮崎県南の村長さんは自分の村の港湾を改修してもらつたために度々、上京された。その人は何時でも紙芝居を持参された。「第一期工事をすればこうなります。第二期工事の後はこのように立派になります。」という具合に、求めもしないのに何時の間にか紙芝居を始められる。見るともなく聞くともなくこの紙芝居に視聽を奪われるのが人情である。彼はちゃんとその二つを心得ている。私はこの村長さんと仲好しになつてしまった。私のいない時には机の上

に「紙芝居村長上京。よろしく」と置き手紙がおいてあったりする。なかなかの知恵者である。この種の陳情は「アトラクション型」とでも名づけられようか。

陳情によつては恐ろしく多数の人々を動員して実効を挙げようとする方法がある。私が公共事業課長をしていた昭和二十四年の一月一日に、数千という年賀状が舞込んで驚いたことがある。それは新潟県の或る漁村の善男善女からの賀状であつた。賀状には年賀の挨拶と共に漁港修築への至純な念願がしたためてあつた。老若男女を問わず、よくもこのように多数の人を動員できたものだと感じたものだが、近頃になつて、この種の陳情が多く見受けられるようになった。労働組合の賃上げ問題を始めとして、所得税法の企業組合擁護、ガソリン税軽減、物品税撤廃、信用協同組合の員外預金の受入れ反対或いは賛成、電力復元反対等々、悉く大量の郵便による陳情である。郵政省はこれがため相当の収入増になるだろうが、中には電信によるものも多くなつてきた。陳情を少数の人の独占から解放して大衆の手に還えそうという戦術である。これは「大衆動員型」とでも名づけるべきであらう。

下情上達の方法には色々あるが、あまりあくどくなつてどうかと思われるものが多くなつてきたのが、今日の風潮であらうと思つ。しかし陳情は一切いけない等というのも誤りである。

よきにつけ悪しきにつけ陳情というものがあつてこそ、お上の眼も開かれ事情にも通じてくるわけであり、停滞している仕事も促進され、手を染めなければならぬ仕事にも手をつけるようになってくる。陳情はよろしく事情を描写し要求の要点を外さぬことが大事であり、尚能率的で程のよい気品を備えたものであつてほしいと思う。又時には男許りでなく美しい女性も交つたものであつてほしいと思う。何事にも潤いというものが大切だから。唯陳情戦術の展開も已むを得ないが、これはできるだけ安価に能率的にやつてもらいたい。そのために費消される公金は莫大なものだからである。反面政府のお役人の現地出張も、なくもがなの場合が少くない。更に現地に行つて酒肴の招待に預るなどというのは決してよいこととは言えない。近頃のように陳情や視察の洪水は決して日本の名譽ではない。根本は政治の貧困に帰するわけだが、地方においても十分自肅戒心すると共に、新しい工夫をこらしてもらいたいと思う。天使が若し地上を訪問してこの有様を見たら、これほど滑稽なことはあるまいといつて驚きもし嘆きもするであらうと思われる。